

イスラーム教の伝播と西アジアの動向

イスラーム教は、西アジアの東西南北に広く伝播して、ヒトやモノの交流をうながした。また西アジアは、十字軍やモンゴルの襲来を受けつつも、カイロを中心に発展した。

Q▶ イスラーム教はどこまで広がり、諸地域をどのように結びつけたのだろうか。

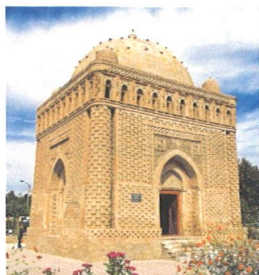
イスラーム教の諸地域への伝播

1

Q▶ イスラーム教は、諸地域へどのように広がったのだろうか。

中央アジアの イスラーム化

Q▶ イスラーム化は、中央アジアにどのような変化をもたらしたのだろうか。



サーマーン朝の廟 イスラーム時代の中央アジアで最古の建造物。焼き煉瓦が精巧に組み合わされている。ブハラ。

8世紀初め、アラブ＝ムスリムの遠征軍が中央アジアのオアシス地域を征服すると、この地の人々はしだいにイスラーム教を受容するようになった。さらに、アラブ軍は751年にタラス河畔の戦いで唐軍を破り、その勢力を後退させた。やがて中央アジアとイラン東北部には、アッバース朝の地方政権としてイラン系のサーマーン朝が成立し、アラビア文字で表記されるペルシア語などイラン＝イスラーム文化の基礎が生まれた。またサーマーン朝は、すぐれた騎馬戦士であった草原地帯のトルコ人を、

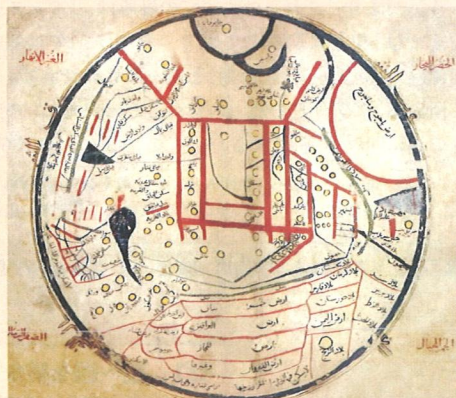
トルコ人とイスラーム

——『トルコ語・アラビア語辞典』序文より

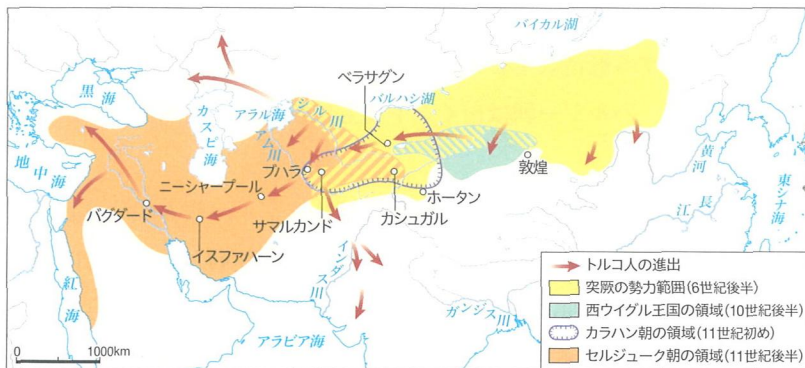
中央アジア出身のカーシュガリーは、1077年頃にバグダードで『トルコ語・アラビア語辞典』（『テュルク諸語集成』）を完成してカリフに献呈した。その序文で彼は、預言者ムハンマドの言葉を引用している。

「……私は二人の信頼できる学識者から、トルコ人の出現を予見した預言者ムハンマドの言葉を伝え聞いた。トルコ語を学べ、彼らの支配は長く続くから、と。そうだとすれば、トルコ語を学ぶことは宗教的な義務である。たとえ、この伝承が正しくなろうと、理智はこれを求める。」

Q▶ この伝承の真偽は不明だが、以後トルコ人は西アジアでどのような役割を果たしたのだろうか。



『トルコ語・アラビア語辞典』に描かれた世界地図
中央アジアを中心に上が東。円周最上部の地名は「ジャーバルカー」と記され、日本と推定されている。



トルコ人の西進とトルコ系諸国の領域

カリフの親衛隊にマムルーク（奴隷軍人）として供給した。

一方、9世紀半ばにウイグルが滅亡したあと、中央ユーラシアではトルコ系遊牧集団の西進が活発化した。彼らが建てた**カラハン朝**は、10世紀半ばにイスラーム教を受容したのち①、サーマーン朝を倒して中央アジアのオアシス地域にも進出した。こうして中央アジアにはトルコ語を話す人々が数を増し、この地域はやがて「**トルキスタン**（トルコ人の土地）」と呼ばれるようになった。また、11世紀にはアラビア文字を用いたトルコ語の文学作品も生まれた。



トルコ系騎馬戦士像 トルコ系の騎馬戦士は、馬上からの騎射を得意とした。後退しながらの騎射も、彼らの得意とする戦法であった。

①トルコ人のイスラーム化は、サーマーン朝による征服や布教者の活動、ムスリム商人との接触、遊牧君主の改宗に臣下が従うなど、様々なかたちで進んだ。

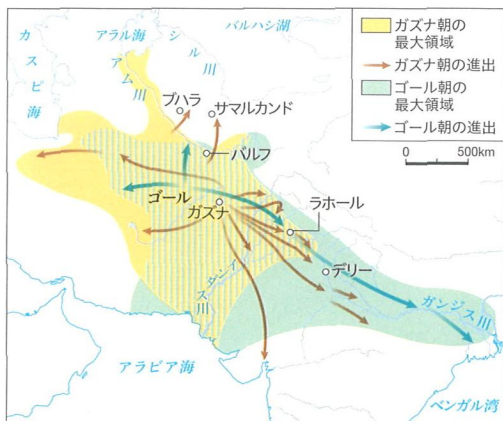
②奴隷王朝の後に、ハルジー朝・トゥグルク朝(1320～1414)・サイイド朝(1414～51)・ロディー朝(1451～1526)と続いた。

南アジアへのイスラーム勢力の進出

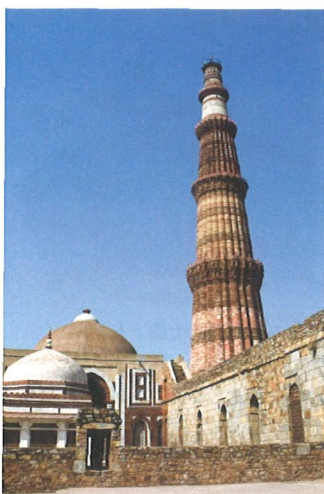
▶ 南アジアにおいて、イスラーム教はどのように受け入れられていったのだろうか。

ヴァルダナ朝の滅亡後、南アジア各地に様々な勢力が割拠するなかで、10世紀末から中央アジアのイスラーム王朝が北インドへの軍事進出を開始し、アフガニスタンを拠点とする**ガズナ朝**と、ガズナ朝から独立した**ゴール朝**が侵攻を繰り返した。ラージプートと呼ばれたヒンドゥーの諸勢力は一致して対抗することができず、13世紀初めに南アジアで最初のイスラーム王朝が誕生した。

その王朝は、ゴール朝の遠征に同行し、支配地を任された将軍**アイバク**がデリーに創始した。彼が奴隷軍人出身であったことから、これを**奴隷王朝**と呼ぶ。また、奴隷王朝を含め、その後にデリーを本拠としたイスラーム諸王朝は、**デリー＝スルタン朝**と総称される②。そのうち、ハルジー朝は地租の金納



ガズナ朝とゴール朝のインド進出 ガズナ朝の君主マフムード(在位998～1030)は、インドに十数回にわたって侵攻した。



クトゥブ=ミナール アイバクが建設したといわれるインド最古のモスクにある塔。高さ72.5m。デリー近郊。

化をはじめとする経済改革を実施し、のちにムガル帝国^{とうち}の統治^{→p.166}に受け継がれた。また、ハルジー朝は南インドにも侵攻して、支配地域を拡大した。

イスラーム勢力の進出により、初期にはヒンドゥー教寺院が破壊されることもあったが、現実の統治でイスラーム教が強制されることはなかった。イスラーム信仰は、神への献身を求めるバクティヤ^{くきやう}や、苦行^{→p.59}を通じて神との合体を求めるヨーガなどの旧来の信仰とも共通性があったために、都市住民やカースト差別に苦しむ人々のあいだに広まった。ヒンドゥー教とイスラーム教の要素を融合した壮大な都市が建設されるとともに、サンスクリット語の作品がペルシア語^{ほんやく}へ翻訳^{→p.30}されるなど、インド=イスラーム文化が誕生した。

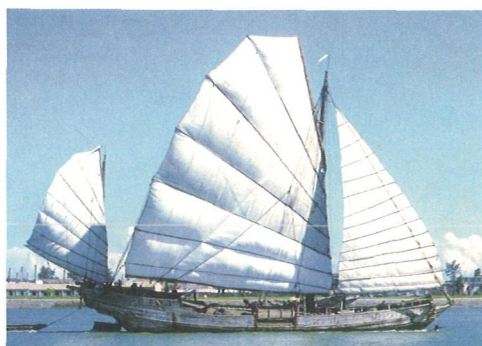
東南アジアの交易とイスラーム化

Q 東南アジアでイスラーム化が進んだのは、なぜだろうか。

8世紀頃になると、イラン人やアラブ人のムスリム商人が東南アジアから中国沿岸にまで進出しはじめた。しかし、彼らが拠点^{きょてん}としていた広州^{しゅう}が黄巢^{こうそう}の乱で破壊されたために、ムスリム商人はマレー半島まで撤退^{→p.52}することになった。他方^{とう}、唐を中心とした国際秩序がゆるんで朝貢貿易が不振^{ふしん}になったことから、中国商人が西方との交易^{こうえき}にジャンク船で直接参加するようになった。その結果、東南アジアには様々な地域からの商人が進出することになった。

10世紀後半になると、チャンパーや三仏齊^{さんぶっせい}などが宋^{そう}に対して朝貢し、また、ムスリム商人が広州や泉州などに居留地^{きゅうりゅうち}をつくる一方で、中国商

人も東南アジア各地に進出し、東南アジアと中国とのあいだで活発な交易がみられた。つづく13世紀後半、南宋^{なんそう}を征服^{げん}した元^{げん}（モンゴル）は、アジアの海域へ進出した。元軍の軍事侵攻に対し、ベトナムの陳朝^{ちん}はこれ^{→p.62}を退けたが、ビルマのパガン朝^{めつばう}は滅亡^{→p.61}した。他方、ジャワでは朝貢を求めて侵攻してきた元軍^{かんしやう}の干渉を排し、ヒンドゥー王朝のマジャパヒト王国^{Majapahit 1293~1527頃}が成立した。元は海上交易に積極的であり、軍事遠征の終了後も、中国商人やムスリム商人とともにこの地域での交易活動を



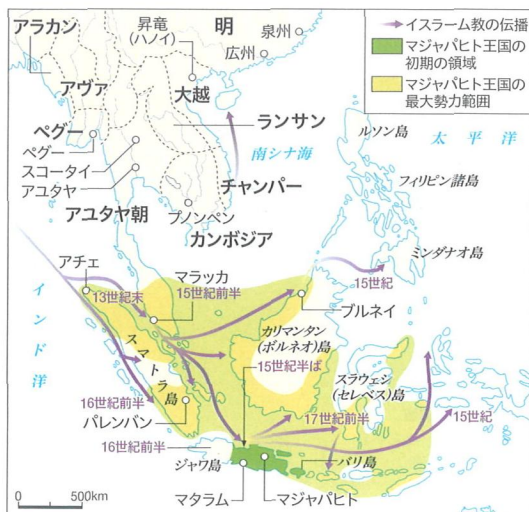
ジャンク船 遠洋航海が可能な大型の木造帆船で、貨物の積載量にもすぐれていた。

進めた。

このような交易ネットワークの広がりにも
なって、東南アジアにもイスラーム教が広まって
いった。13世紀、諸島部を中心にムスリム商人や
スーフィーなどを中心とする神秘主義教団が活動
し、同世紀末にはスマトラ島に東南アジアで最初
のイスラーム王朝が成立した。

マラッカ王国は、明が15世紀に鄭和を数回にわたってインド洋地域へ遠征させた際に重要な拠点となったことから、国際交易都市として大きく

発展した。この王国は当初タイのアユタヤ朝に従属していたが、明の後ろ盾を得てそれから脱し、明と朝貢関係を結んだ。その後、明は対外活動を縮小する方向に転じたため、15世紀半ばにアユタヤ朝がマラッカ支配の回復を試みた。しかし、マラッカの王はイスラーム教を旗印にし、西方のムスリム商人の勢力との関係を強化することでそれを阻止した。その結果、同世紀後半にはマラッカ王国は東南アジアで有力となり、マラッカを拠点にイスラーム教はジャワやフィリピンへと広まった。イスラーム王朝として、スマトラではアチェ王国が成立し、ジャワではマジャパヒト王国の滅亡後、イスラームの



東南アジアへのイスラーム教の伝播

① アクスム王国は、一時はアラビア半島南部も支配したが、紅海沿岸とエジプトのイスラーム化にともなって弱体化した。

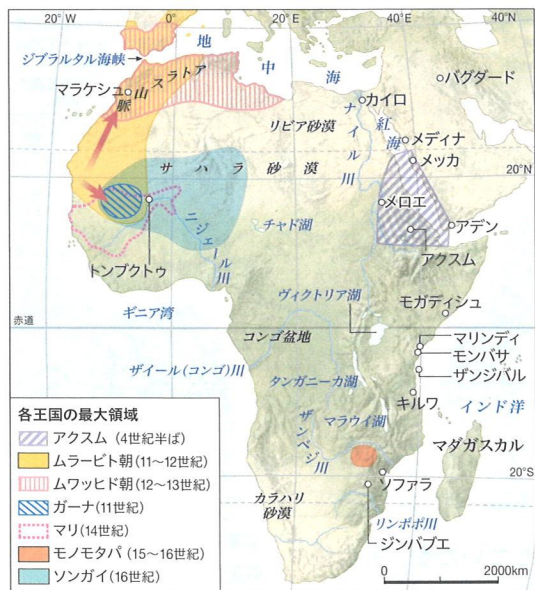
アフリカのイスラーム化

Q アフリカのイスラーム化をうながした要因は何だろうか。

イスラーム教の成立以前、エチオピア高原では、キリスト教徒の王が支配する**アクスム王国**が、ナイル川流域と紅海方面を結んで金や奴隷、象牙を扱う交易で栄えていた①。これより南のアフリカ東岸の海港では、古くからアラビア半島やイラン方面との海上交易がおこなわれていたが、この交易はアッバース朝やファーティマ朝の繁栄とともに活発化し、金や香料、象牙などが東アフリカから輸出された。海港に住みついたアラブ系やイラン系のムスリム商人は、季節風(モンスーン)を利用してダウ船を操り、広大なインド洋海域を結ぶ交易ネットワークに参加していった。やがてモガディシュ・マリンデ



ダウ船 大きな三角帆を備えた木造帆船。



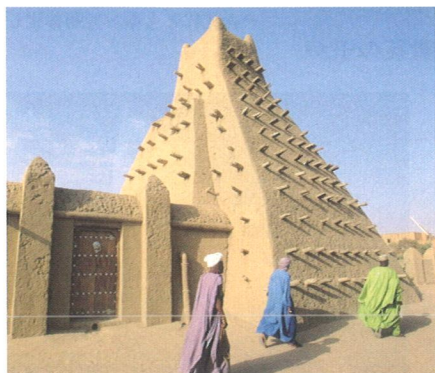
16世紀までのおもなアフリカの国々 西アフリカのイスラーム化は軍事的な征服によってもうながされたが、東アフリカの海港都市と同様に、ムスリム商人の活動がイスラーム化のもう1つの要因であった。

① スワヒリ(サワーヒリー)とは、アラビア語で「海岸地方に住む人々」を意味する。スワヒリ語は現在ケニアやタンザニアなどで公用語として用いられている。

イ・キルワなどの海港が連なる海岸地方では、アラビア語の影響を受けたスワヒリ語①が共通語として用いられるようになった。さらに、その南方のザンベジ川以南では、14世紀頃からモノモタパ王国などの国々が栄えたが、金・象牙の輸出と綿布・陶磁器などの輸入には、ムスリム商人が大きく関わっていた。この地域の繁栄ぶりは大ジンバブエの遺跡にもよく示されている。

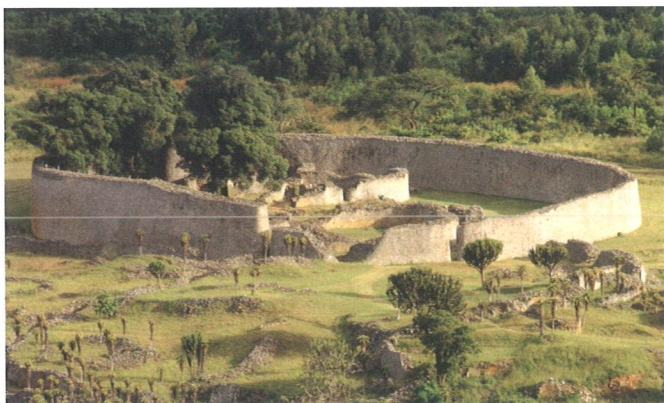
西アフリカでは、ガーナ王国がラクダを用いてサハラ北部の岩塩と自国の金を交換する隊商交易で栄えていた。北アフリカのイスラーム化後、ファーティマ朝などで金の需要が増したため、ムスリム商人による塩金交易は大きく発展した。11世紀後半にムラービト朝の攻撃を受けてガーナ

王国が衰退すると、西アフリカのイスラーム化が進み、その後におこった「黄金の国」と呼ばれたマリ王国や、それに続くソングアイ王国の支配階級はイスラーム教徒であった。ソングアイ王国は西アフリカの隊商都市の大部分を支配し、北アフリカとの交易で栄えた。とくにニジェール川中流の交易都市トンブクトゥは、アフリカ内陸部におけるイスラームの学問の中心地として発展した。



トンブクトゥのモスク トンブクトゥは岩塩と金の交易都市として栄え、ムスリム商人も数多く居留し、モスクが建設された。マリ王国のマンサ＝ムーサ王(在位1312～37)の時代が最盛期。

大ジンバブエ(下)「石の家」を意味する巨大な石造建築遺跡群。写真は14～15世紀に建設された神殿で、煉瓦状の石材を積み重ね、整然とした外観を呈している。ジンバブエ共和国南部。



西アジアの動向

2

Q▶トルコ人の進出や、十字軍・モンゴル勢力の襲来などにより、西アジアの社会はどのように変化したのだろうか。

トルコ人の西アジア進出 とセルジューク朝

Q▶トルコ人の進出によって、西アジアにはどのような変化がおきたのだろうか。

西アジアへのトルコ人の進出は、アッバース朝カリフらによる9世紀初めのトルコ系マムルーク(奴隷軍人)の登用に始まった。騎馬の技術にすぐれた遊牧民の少年を奴隷として購入し、親衛隊などとして活用する手法は、まもなく各地のイスラーム政権に広まった。

つづいて11世紀には、トルコ系の遊牧部族が中央アジアから集団で西進し、セルジューク朝を建てた。彼らは1055年にブワイフ朝を追放してバグダードに入城し、イラン・イラク・シリアの支配者となった。セルジューク朝の創始者トゥグセル・ベクはスンナ派を掲げ、名目的な存在となっていたアッバース朝カリフからスルタン(支配者)の称号を得た。セルジューク朝は、軍事面では遊牧部族軍と並んで同じトルコ系のマムルークを重用し、統治面ではイラン系の官僚を登用した。なかでもイラン人の宰相ニザーム・アルムルクはペルシア語で『統治の書』を著し、正しい君主のあり方を説いた。また、彼はイスラーム諸学を振興し、司法や行政を担うウラマーを育てるためのマドラサ(学院)を各地につくった。

マドラサで学んだ者のなかでは、ガザーリーが名高い。彼はイスラーム諸学の完成者として知られる一方、後半生では神秘主義(スーフィズム)に傾倒して、これを大成させた。イスラーム法に従いつつ、神への愛を説くその神秘主義思想は、スンナ派思想の展開に大きな影響を与えた。

また、セルジューク朝の庇護を受けた数学者・天文学者のウマル・ハイヤームは、すぐれたペルシア語による四行詩集(『ルバイヤート』)も残し、新たなペルシア語文学の世界を開拓した。

セルジューク朝では、イクター制と呼ばれる軍事封土制度が広くおこなわれた。ブワイフ朝時代に始まったこの制度は、軍事奉仕の代償とし



馬上で訓練するマムルーク騎士 少年のマムルークは、アラビア語や『コーラン』の学習とともに、馬上で槍・弓・剣などを扱う訓練をほどこされた。

②彼の創設したマドラサは、その名にちなんでニザーミーヤ学院と呼ばれる。その後、こうしたマドラサは各地に広がり、発展した。

アナトリアにルーム＝セルジューク朝が建設され、イランでホラズム＝シャー朝が自立するなど、セルジューク朝は衰退へと向かった。



サラフ＝アッディーン(サラディン) 初めにザンギー朝、ついでファーティマ朝に仕えて権力を握り、1169年にアイユーブ朝をおこした。また、87年のエルサレム奪回後は第3回十字軍(→p.118)と戦った。

① シリアは、歴史的には地中海東岸地域の総称であり、現在のシリア・レバノン・パレスチナ・ヨルダン・イスラエルにあたる。

② 十字軍は、シリアの沿岸部にエルサレム王国(→p.118)をはじめとする複数の国を建て、現地の住民を支配した。こうした十字軍国家は、周辺のイスラーム諸政権と同盟や対立を繰り返しながら、13世紀末まで存続した。

エルサレムの旧市街 右上に見えるのがイスラーム教徒の建設した岩のドーム。エルサレムはメッカ・メディナにつぎ、イスラーム教第3の聖地であり、またユダヤ教・キリスト教の重要な聖地でもある。

11世紀後半の西アジア・北アフリカ

て軍人に農村などからの徴税権を付与するもので、こののち西アジアの諸政権で継承された。

また、セルジューク朝は11世紀後半にアナトリア東部でビザンツ帝国軍を破り、配下の遊牧部族軍をアナトリアの西方へ送り込んで、その大半を支配下に入れた。しかし、こうしたセルジューク朝の伸張に対抗するために西ヨーロッパで十字軍が組織され、シリア①に侵入してエルサレムなどを奪った。セルジューク朝は十字軍の襲来に対して有効に対抗できず、こののちおよそ200年にわたって十字軍国家②が存続した。

十字軍とアイユーブ朝

Q▶ 十字軍は、西アジアに何をもたらしたのだろうか。

十字軍の襲来と十字軍国家の成立は、シリアをはじめとする西アジアの情勢を複雑化させた。セルジューク朝から自立したシリアのザンギー朝や、クルド系軍人のサラフ＝アッディーン(サラディン)がファーテ



イマ朝を廃してエジプトにおこしたアイユーブ朝は、十字軍やそのほかのイスラーム諸政権と抗争した。さらに、サラフ＝アッディーンは1187年に十字軍からエルサレムを奪回した。

十字軍は、西アジア社会にとって突然の侵入者であり、

以前からこの地に住んでいたイスラーム教徒とキリスト教徒のあいだにも対立をもたらした。しかし、十字軍国家が長く存続したこととともなう、西ヨーロッパと西アジアとの文化的・経済的な接触や交流もうながされた。

アイユーブ朝は、ファーティマ朝時代のシーア派にかわってエジプトでスンナ派の支配を回復させるとともに、イクター制を採用し、トルコ系のマムルークを重用した。そのなかから、つぎの**マムルーク朝**が生まれた。

イル＝ハン国の西アジア支配

Q モンゴル勢力の進出は、西アジア社会にどのような影響を与えたのだろうか。

13世紀半ば、東方からモンゴル勢力が西アジアに襲来した。

フレグの率いるモンゴル軍は、1258年にバグダードを攻略してアッバース朝のカリフを殺害し、500年余り続いたアッバース朝は滅亡した。

フレグの建てた**イル＝ハン国**(フレグ＝ウルス)は、イラン・イラクを**タブリーズを都に定めた**。

支配しながら当初はイスラーム教を軽視したが、第7代**ガザン＝ハン**がイスラーム教に改宗し、ムスリム社会からの支持を得た。また支配にあ

たっては、イラン系の官僚を重用して財政制度を整えた。経済的には、

モンゴルによるユーラシア大陸や海域の交通網の整備を背景に、東西交易が活発になった。文化面では、東アジアの影響を受けて、写本絵画や

陶器製造などの芸術が発展した。さらに、ユーラシア世界史である『集

史』を著したイル＝ハン国の宰相ラシード＝アッディーンらのすぐれた

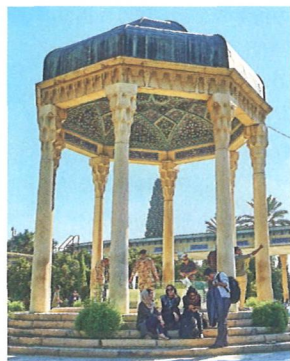
歴史家や、ハーフィズらの詩人も活躍し、イラン＝イスラーム文化が花開いた。



モンゴル軍によるバグダード攻略 1258年、フレグは20日余りの攻防の末にバグダードを陥落させた。図の左端には大型の投石機も描かれている。また、こうした投石機は南宋(→p.139)への攻撃にも用いられた。



『集史』に描かれた中国王朝の君主たち これは画家たちが想像で描いたものだが、モンゴルの征服により東西が結ばれた影響がうかがわれる。



ハーフィズ廟 ハーフィズはイル＝ハン国下のシーラーズで生涯を送った。恋や酒をうたったその詩は、現在のイランでも広く愛されている。



13世紀後半の北アフリカ・西アジア・南アジア

マムルーク朝と カイロの繁栄

Q マムルーク朝のもとでのカイロの繁栄は、どのように実現したのだろうか。

13世紀半ば、エジプト・シリアの支配権は、アイユーブ朝から **マムルーク朝** (1250~1517) へとかわった。

これは、アイユーブ朝君主によるマムルークの重用の結果、彼らのなかの有力者がスルタンの地位を引き継ぎ、それを継承していったためである。第5代スルタンのバイバルスは十字軍を破り、まもなく十字軍国家は消滅した。また、バイバルスはシリア方面への進出を試みたモンゴル勢力も破り、その西進を阻止した。14世紀前半には、イル＝ハン国とマムルーク朝のあいだに和約が結ばれ、それぞれの統治が安定した。

マムルーク朝の軍人らは都市に居住したが、イクター制により農村の徴税権を与えられ、農民と農業生産を管理した。また、マムルーク朝のもとでナイル川の治水管理が進み、農業生産力は向上した。

首都カイロは商業・手工業の中心として栄えた。カイロを拠点とするカーリミー商人らが、南アジア・東南アジアからもたらされた香辛料を扱う交易に従事し、歴代のスルタンは彼らと結んで利潤を独占した。また、スルタンや有力な軍人は、イスラーム教にそった善行として、カイロ市内にモスク、マドラサ、病院、聖者や自身の廟などを建設し、それに土地や市場(スーク、バザール)の商業施設などを寄進して安定的な運営をはかった。ただし、14世紀半ば以後、たびかさなる黒死病(ペスト)の流行が都市の繁栄に打撃を与えた。

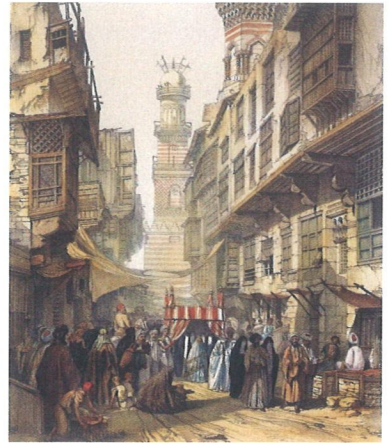
- ①多くのイスラーム教徒は、ムハンマドの子孫や神秘主義の指導者など、様々な出自の「聖者」に神へのとりなしを求め、聖者廟に参詣して祈願をおこなった。
- ②こうした寄進の制度をワクフといい、それに関わるイスラーム法も整備された。
- ③イスラームにおける神秘主義者をスーフィーという。「粗末な羊毛(スーフ)をまとったもの」がその語源とされる。

マクリースー『年代記』にみる14世紀のカイロ

この年、ナイルの増水は満水前に止まってしまった。そのため穀物価格は上がり、小麦1アルデブが20ディルハム(銀貨)にまで上昇した。その後ナイルの水位は〔適正な〕16ズィラーに達したが、3日間で急に4.5ズィラーも上昇したために、脱穀場にあった穀物が大きな被害を受けた。またこの年は大雨やネズミの害、あるいはまた政府による財産没収などの災禍が重なったために、実に厳しい1年であった。

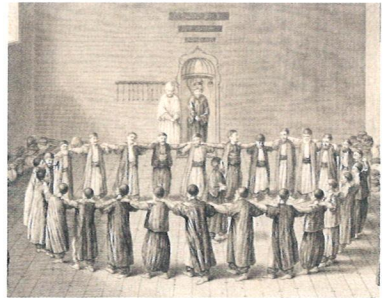
(佐藤次高『中世イスラム国家とアラブ社会』)

▶ これは、マムルーク朝期の官僚で学者でもあったマクリースーが残した『年代記』の1337/38年の記述である。エジプトの社会不安が、どのような原因によると彼は指摘しているだろうか。



カイロの町並み マムルーク朝スルタンにまつわる建造物を背景に、婚礼の行列が描かれている。19世紀作成。

マムルーク朝のもとでは、都市的な文化が花開いた。百科事典や伝記集が編纂され、それまで蓄積されてきた学問の体系化が進んだ。さらに、**イブン=ハルドゥーン** (Ibn Khaldun, 1332~1406) の『世界史序説』のように、為政者の腐敗や社会の動きに批判的な目を向ける著作が数多く生み出された。また、各地のイスラーム教徒のあいだには、神への愛や神との一体化を強調する**神秘主義** (sufism, スーフィズム) が広がった。エジプトやシリアの都市や農村では多数の神秘主義教団が活発に活動し、聖者廟への参詣が信仰や娯楽のために広くおこなわれた。



神秘主義(スーフィズム) 12世紀頃から、聖者とされたスーフィーなどを中心に教団がつくられ、教団員は『コーラン』の読誦や様々な儀式を通じて神との一体化をめざした。

北アフリカ・イベリア半島の情勢

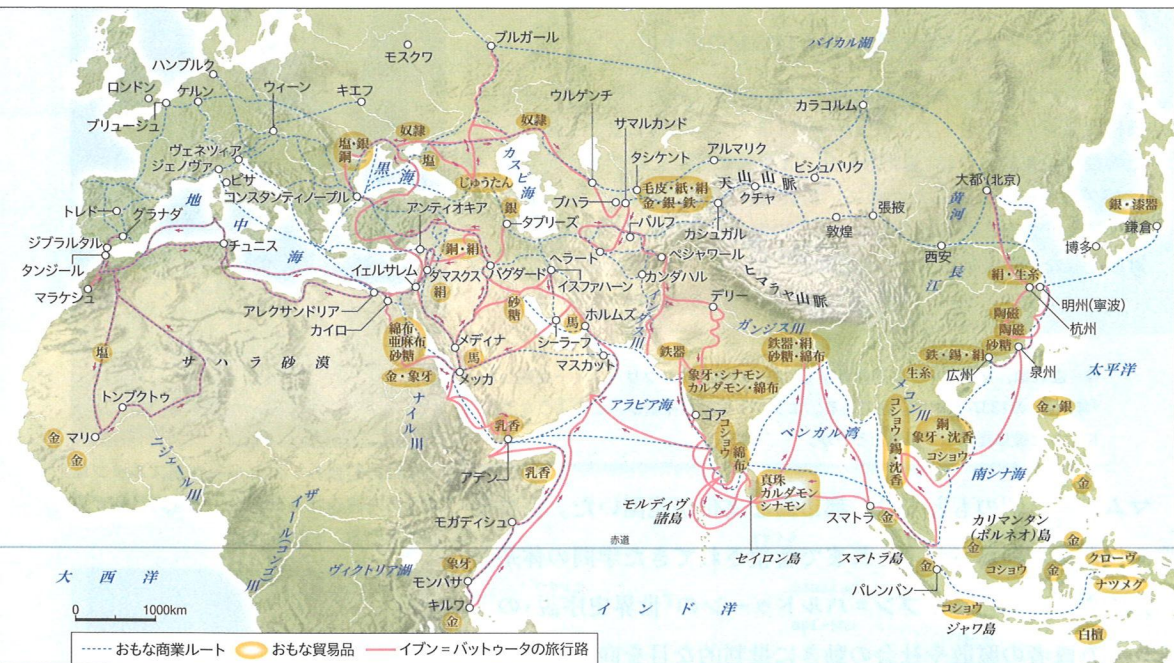
▶ この時期に、イベリア半島ではどのような変化がおこったのだろうか。

11世紀半ばの北アフリカ(マグリブ)では、先住民ベルベル人のあいだに熱狂的な宗教運動がおこり、イスラーム教への改宗が急速に進んだ。この宗教運動は、モロッコのマラケシュを中心とする国家建設に結び付き、**ムラービト朝** (Murabit, 1056~1147) とつづいて**ムワッヒド朝** (Muwahhid, 1130~1269) が勢力を誇った。

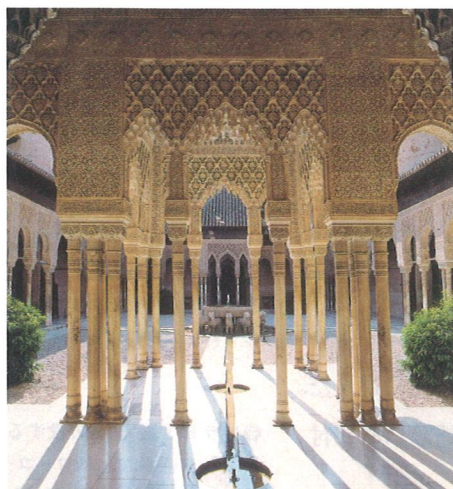
イベリア半島では、後ウマイヤ朝の滅亡後に小国家が乱立していたが、北部のキリスト教徒による**国土回復運動(レコンキスタ)** (→p.131) が始まると、それに対抗するため、ムラービト朝やムワッヒド朝が半島に進出した。政治的な混乱の一方で、半島南部ではしだいにイスラーム教とアラビア語の受容が進み、12世紀には住民の大半がイスラーム教徒となった。しかし、社会的にはアラブ人やベルベル人が優位な地位を占めた。また、トレドやコルドバ、セビリアなどの諸都市が、毛織物業や北アフリカ・

④ アラビア語で「目の没するところ」の意味で、モロッコ・アルジェリア・チュニジアなどの北アフリカ西部を指す。

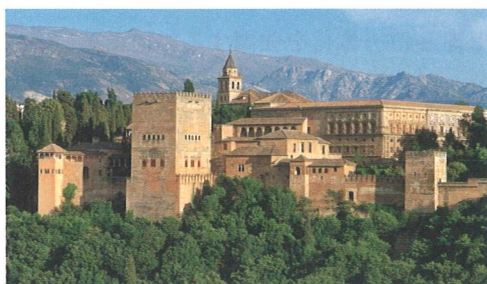
⑤ 中世の西ヨーロッパでは、トレドを中心にイブン=シーナー(→p.89)やイブン=ルシユド(→p.116)らのアラビア語の著作や古代ギリシア文献のアラビア語訳書が盛んにラテン語に翻訳され、これは12世紀ルネサンス(→p.135)へとつながった。



ムスリム商人の交易とイブン=バットゥータの行程



アルハンブラ宮殿 左は華麗な装飾文様の建物に囲まれた「獅子の中庭」。右は宮殿の外観。14世紀の建造。



アルハンブラ宮殿の装飾

エジプトなどとの交易で栄えた。

文化面では、イベリア半島や北アフリカから、アリストテレスの著作への注釈で知られる哲学者のイブン=イル

シュドや、『大旅行記』で知られるイブン=バットゥータ

らのイスラーム文化を代表する文人が生まれた。

キリスト教徒勢力によるレコンキスタは、イベリア半島最後のイスラーム教徒の王朝となったナスル朝の滅亡により、1492年に完成した。ナスル朝は、グラナダのアルハンブラ宮殿などのすぐれた建造物を残した。

レコンキスタの進行にともない、イスラーム教徒の一部は北アフリカに移住したが、半島に残った多くの者はキリスト教に改宗する道を選んだ。

① 同じく異教徒とされたユダヤ教徒も改宗や移住をよぎなくされ、一部はオスマン帝国(→p.162)に保護された。